

# 豊かな体験活動を活かした「環境」の学習 その3

## —第5学年「太田川源流探検隊」の実践を通して—

佐藤 健

### 1. はじめに

高学年における環境領域のねらいは次のとおりである。

様々な角度から環境を見つめ、環境保全に向けて進んで行動しようとするができる。

このねらいとこれまでの環境領域における実践の積み重ねを受けて、第5学年では、次のような子ども像を設定した。

- 豊かな体験活動を通して、より広い視野から水の高さと問題点を感じることでできる子ども
- 水を取り巻く環境について考え、自分と水との関わりに思いを巡らせることでできる子ども

河川の汚れが顕著な下流域に住む子どもたちの多くは、そこで日々目にしている汚れた川を川一般のイメージとして捉えているであろう。逆に、清水が湧き出る源流域に住む子どもたちは、「川は美しいもの」というイメージを抱いているであろう。川は環境は、流下過程において周囲から様々な影響を受けることで、時にはゆるやかに時には急激に変化している。より広い視野から環境を見つめるためには、普段、なかなか触れることのできない環境と出会う場を設定することが大切である。そこで、第5学年の環境の学習では、これまでの第3学年からの一連の太田川の学習を発展させ、より広い視野から身近な環境について考えることができるように、源流域を活動の場とすることとした。

### 2 実践事例 — 太田川源流探検隊 —

#### (1) 単元の概要

##### ① 太田川源流探検隊について

昨年度までの環境領域の学習において、子どもたちは、太田川に関わる様々な直接体験を積み重ねてきている。猿猴川を皮切りに、太田川上流を2年間継続して探検したり、第4学年では、太田川が注ぐ江田島へ「海の学習」に行ったりしてきた。これらの活動において、子どもたちは、上流から下流へと流れる循環する水の概要を大まかに捉えるとともに、豊かな自然と触れあう機会をもつことができた。また、探検後は、それぞれの興味・関心に基づいた発表会を行い、それぞれの思いの交流を図った。これらの学習を通して子どもたちは、「もっと上流に行きたい」「源流を探してみたい」と思うようになった。豊かな森林に囲まれ、水が生まれる源流域を探検することで、より広い視野から水を感じ、水について進んで関わろうとすることが期待できる。

太田川は水都広島を代表する川である。総延長103kmに及ぶ河川は、冠山に源を発し、広島湾へとそそぐ。水は、流下する過程で様々な変化を受けている。太田川は、子どもたちにとって身近であるだけでなく、軸教材として継続的に関わっていく価値のある対象といえる。

指導にあたっては、まず、これまでの様々な太田川探検の場面を想起する場を設ける。そのことで、子どもたちは見通しをもち、様々な活動に没頭しようとするであろう。また、宿泊を伴う吉和「山の学習」では、源流域の水やその周りの自然に直接的に触れることで、「水が生まれる源流域」に目を向けることができるようにしたい。単元のまとめでは、「次の〇〇隊に向けて」と題し、第6学年での環境の学習に思いを巡らせる場を設けることで、水を入り口として身近な様々な環境と

主体的に関わっていくことができるようにしていきたい。

②指導内容と計画（全15時間）

これまでの学習から （2時間）	吉和「山の学習」に行こう！ （4時間+宿泊学習）	源流探検隊報告会 （3時間）
《オリエンテーション》 ①探検活動の想起 ○3年：猿猴川探検隊 太田川探検隊パートI ○4年：太田川探検隊パートII 江田島「海の学習」 ②環境の学習でねらうもの ○これまでの学習を活かして ○これまでの学習を発展させて	《話し合い》 ①君は、冠山隊？それとも、源流の森隊？ ②どんな活動、どんな準備を（夏休みの活用）！ 《体験活動》 ○冠山隊 ・源流の水を飲む、源流碑建立、森の観察等 ○源流の森隊 ・水質調べ、沢遊び、植樹、水を飲む、生き物調べ等	《話し合い、準備》 ①探検報告会 -こんな活動ができたよ。 -そっちはどうだった？ ②次の○○隊に向けて -どんな場所で -どんな活動を

(2) 実践の概要

① 第一次の展開 - 省略 -

② 第二次の展開

(a) 探検の計画を！

第二次は、源流探検における2つの活動の場—【源流の森隊】と【冠山隊】—を紹介することからスタートした。まず、下見を行った際のVTRや写真、現地の様子を紹介することで、子どもたちが、今回の源流探検の魅力を感じることができるようにした。子どもたちは、特に、岩の間からしみ出す水や周囲の豊かな自然に注目していた。ここでは、「早く行ってみたい。」「どんな探検をしようかな？」などの反応を見ることができた。次に、どの探検隊に所属するかを、子どもたち自身の選択に基づいて決定することにした。探検隊は、限られた3泊4日の「山の学習」の丸1日を使った活動である。子どもたちにあわただしい活動を求めるのではなく、ゆっくり、じっくりと自然の中に身を浸してもらいたいと考えた。

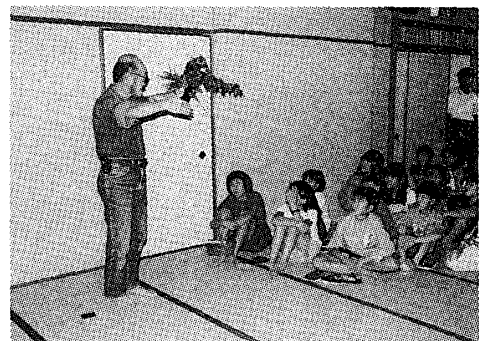
続いて、探検隊ごとに分かれ、考えられる体験活動を提案し合った。子どもたちは、これまでの探検の失敗や成功の経験を活かし、様々な活動と準備物を提案した。ここまでの学習は、夏休み前に行った。夏休みは、個人で準備物をそろえたり、計画の見直しを行ったりする期間とした。

夏休み後、第5学年全体で2つの探検隊ごとにグループ分けを行った。自由な活動と児童の安全の確保という点から、3～5名程度でグループを作るように促した。グループを作った後は、グループごとにめあてやリーダー、係分担を決めたり、活動計画と準備物の確認を行ったりした。

(b) いざ、探検へ出発！

9月8日（水）—広島駅に集合し、可部線で一路、筒賀駅に向かった。加計駅までは、3・4年生の時に探検に出かけているが、そこから上流になると、多くの子どもにとって初めての経験となったようである。可部以北は、ほぼ、太田川と平行して線路が走っている。子どもたちは、水量や水質の違い、川の見せる表情の違いに興味津々であった。探検を翌日に控えた夜には、写真家で「太田川源流を訪ねる会」会長でもある井手さんに講師をお願いし、「源流講座」を開いた。森の話、プロの写真家の撮られた源流域の写真に子どもたちの目は釘付けとなった。

翌9日—いよいよ、源流探検当日。子どもたちは、思い思いの準備物をリュックに詰め、もみの木森林公園のマイクロバスに分乗し、源流の森、冠山登山口にそれぞれ向かった。子どもたちの活動の様子と感想は次のとおりである。



《源流講座の一コマ》



《源流はもうすぐだ！》

【冠山隊】

- ・源流の水はすきとおってきれいでもっておいしかった。
- ・わき水は冷たくておいしかった。
- ・初めて水がわき出るところを見た。
- ・広葉樹がいっぱいあった。
- ・登りきって満足した。
- ・周りの山々がきれいだった。

③第三次の展開

第三次では、まず、「源流探検隊報告会」を開いた。それぞれの探検隊の様子を子どもの声で紹介し合うと同時に、教師もVTR、写真を用意した。水のきれいさや自然の豊かさなどは共通した体験となり、猿猴川や太田川下流域との違いも更に明らかとなった。続いて、第5学年での源流探検やこれまでの探検活動をふりかえり、第6学年での環境の学習に思いを巡らせる学習を行った。これまでの「水」に関わる学習にすること、丸1日の活動時間で実施可能なことを条件に子どもたちの思いに耳を傾けた。子どもたちの代表的な提案は次のようなものである。

太田川探検パートⅢ（第3・4学年と同じ加計町）に行きたい ……………14名
太田川中流域（流れのゆるやかな所、高瀬堰・大芝水門）に行きたい ……………6名

その他、「再度、源流探検」「ダムの見学」「元宇品」「下水処理場」「浄水場」「瀬戸内海の島」などの解答が見られた。

3 実践を終えて

実践の考察を本実践の「めざす子ども像」に照らして、述べてみたい。

本実践の1つ目のねらいは、「直接体験を通して、より広い視野から水よさの問題点を感じることができる子ども」の育成である。太田川の最初の一滴が生まれる源流域の探検を通して、子どもたちは、水、本来のもつ美しい姿に一様に驚き、感動していた。同時に、「なぜ、広島市の方では、水が汚れてしまうのか？」と疑問や憤りを感じていた。太田川を軸に、継続的に関わっていくことで、より広い視野から環境に目を向けることに一定の成果があったと考える。

2つ目のねらいは、「水との関わりに思いをめぐらせることのできる子ども」を育成することである。本実践では、「環境の保全に向けて行動しようとする」ことを中心的なねらいとはしなかった。まず、身近でありながら、豊かさを残す自然にたっぷりと触れることが大切であると考えたからである。今回の体験は、一人ひとりの子どもの原体験として、子どもたちの心の奥底に、いつまでも残っていくであろう。そして、そのことが、行動化を目標とした第6学年での環境の学習へと継続的に発展していくものと期待している。

4 おわりに

本実践の課題を箇条書きにまとめると次のようなものである。

- ◇じっくり、ゆっくりを合い言葉にしたが、特に、冠山隊は片道約2時間と、かなりきつい日程になってしまった。日程の再考が求められる。
- ◇これまでの体験活動の積み重ねを第6学年での実践に、どう発展的に結びつけていくか。また、複数の場での活動が予想される第6学年での活動において、探検時の子どもの支援体制はどうか。

実践を通して、これらの課題を明らかにしていきたい。